

『伝統野菜をつくった人々』

「種子屋」の近代史

阿部 希望 著



(農山漁村文化協会・3,500円 税抜)

一次史料をたどる育種の世界

青木 宏高

(NPO法人「良い食材を伝える会」理事)

表紙には彩色を施した細密画を一面に描き、^{すな}川白茎牛蒡、紅丸型廿日大根などが記されている。これは種子袋で、伝統野菜の由来を調べているときに、東京農業大学の図書館で偶然見つけた。野菜種子を入れる袋だが、販売用に作られた種子入れを、なぜこんなに凝ったものになっているのだろうか、と種子屋のことがずつと気になっていた。

種子屋とは、野菜種子の育種から生産・流通を担う業種である。稲作、養蚕に比して、野菜研究は注目されてこなかった分野である。

江戸時代から現在まで、野菜生産の歴史をたどってみると、種子では明治初期までが「在来種」の時代で、明治中期・後期から昭和三〇年頃までは「固定種」、昭和四〇年以降は「F1品種」に分類される。ちなみに、江戸時代中期に野菜の商品化

が始まるが、江戸の人口が一〇〇万人を超え、食料の需要が高まり、江戸近郊の農村が発展する。この時期に生産が忙しく、自家採種の種子生産にまで手が回らなくなり、種子屋が登場する。滝野川人参の種子を販売した記録が残っている。

在来種というのは、遺伝的に雑ばくで親と同じ形状には育たない場合が多い。作る人や作る土地によって形や大きさに不ぞろいが現れる。そこで在来種から形や大きさのそろった品種を選抜し、固定する技術の確立から生まれたのが固定種である。親品種と同じ特長を持つ固定種であるが、在来種との違いは形質が固定されているか否かである。

そして近代都市が形成され、都市人口が増加すると、野菜需要が拡大し、野菜の商品化が進んで、固定種が作り出された。実は、この役割を担ったのが「種子屋」と呼ばれた人々である。固定種の野菜を「生み、育て、広めた」人々なのである。

先述した「在来種・固定種・F1種」分類の背景には、野菜生産を支える育種技術の進歩が存在している。この育種技術の進歩なしには、日本の野菜生産の発展はなかった。これまで注目されてこなかった種子屋が野菜育種の歴史上で重要な役割を果たしてきたのである。

この本をまとめるために著者の阿部希望さんは、明治から昭和戦前の種子屋が残した経営帳簿、注文葉書、種苗カタログなど貴重な史料をたどって八年間を要したという。史料には、生身の人間の熱意と真面目さがあふれている。野菜種子に関心を持つ人に必読の一冊である。



読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2016年2月1日~2月29日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 週刊ダイヤモンド 2016年2月6日号 攻めに転じる大チャンス 儲かる農業		ダイヤモンド社	657円
2 減反廃止 農政大転換の誤解と真実	荒幡 克己/著	日本経済新聞出版社	2,600円
3 週刊エコノミスト 2016年2月2日特大号 農業がヤバい		毎日新聞出版	620円
4 農業と経済 2015年12月臨時増刊号 世界をゆるがす中国農業		昭和堂	1,700円
5 GDP4%の日本農業は自動車産業を超える	窪田 新之助/著	講談社	890円
6 シカ問題を考える バランスを崩した自然の行方	高槻 成紀/著	山と溪谷社	800円
7 農業経済学講義	山崎 亮一/著	日本経済評論社	2,800円
8 農家と農業 お米と野菜の秘密	板垣 啓四郎/監修	実業之日本社	800円
9 漁師と水産業 漁業・養殖・流通の秘密	小松 正之/監修	実業之日本社	800円
10 『ポスト貿易自由化』時代の貿易ルール	林 正徳、弦間 正彦/編著	農林統計出版	4,000円